

# 学 位 論 文 要 旨

氏 名 小 笹 祥 子 

論 文 題 目

「Relationship between the experience of being a bully/victim and mental health in preadolescence and adolescence : a cross-sectional study」

(前青年期と青年期の若者におけるいじめ経験と精神的健康の関連:横断研究)

指 導 教 授 承 認 印

生 池 新



# Relationship between the experience of being a bully/victim and mental health in preadolescence and adolescence: a cross-sectional study

(前青年期と青年期の若者におけるいじめ経験と精神的健康の関連:横断研究)

小笹 祥子

## はじめに

Olweus, D. (1994) は、いじめを「ある生徒が、繰り返し、長期にわたって、一人または複数の生徒による拒否的行動にさらされている場合」と定義している。Ivarsson, T.ら(2005)が13-16歳の若者に実施した調査では、10%が被害経験を、18%が加害経験を、9%が被害と加害の両方を経験していた。青年期の若者におけるいじめ経験と精神的健康との関連については様々な報告がある。Kelly, E.Vら(2015)は、いじめ被害のみの経験者は内向的問題が、加害のみの経験者は外向的問題が多くなると報告している。Luukkonen, A.H.ら(2009)は、いじめの被害、あるいは加害を経験している女子は自殺企図のリスクが高くなると報告している。この点について、前青年期の若者を対象とした調査は少ないが、Williford, A.ら(2014)が小学生(平均年齢10.2歳)を対象に実施した調査では、いじめ経験と抑うつ症状とは関連があると報告している。

本研究の目的は、日本の前青年期及び青年期の若者において、いじめ経験と精神的健康との関連を明らかにする。そのために、いじめの経験を、被害経験のみある者、加害経験のみある者、被害と加害の両方の経験のある者、両方の経験のない者の4群に分類し、精神的健康に差があるか分析した。さらに、いじめ経験と精神的健康への関連は、前青年期と青年期で違いがあるかを検討した。

## 方 法

東京都の小学校2校の5・6年生、及び中学校1校の1・2・3年生の925名を対象に自記式調査を実施した。最初に「この調査に協力しますか」と質問し「協力する」の回答を調査の同意とみなした。調査協力に同意しない保護者は非協力書を提出してもらった。保護者から非協力書の提出があった者、及び「調査に協力しない」と回答した者の調査用紙は破棄した。本研究は北里大学衛生学部倫理委員会の承認を得て実施した。

調査票は、フェースシートといじめに関する質問とYouth Self Report (以下YSRと略す) から構成されている。いじめに関する質問は、いじめという言葉を使用せず「身体的暴力」「無視・仲間はずれ」「言語的暴力」「ネット暴力」「盗み・隠匿・損壊」「脅し」の6種類の暴力について、現在の学年になってから調査実施日までの被害経験と加害経験の有無を質問した。本研究では、6種類のいずれかの暴力を経験した場合をいじめ経験と定義した。YSRは、Achenbachらにより開発されてきた子どもの一連の行動調査票であり、11歳から18歳を対象とする自記式調査票で、問題行動に関する計103

の質問項目から構成されている。8つの下位症状尺度の「ひきこもり」「身体的訴え」「不安/抑うつ」「社会性の問題」「思考の問題」「注意の問題」「非行的行動」「攻撃的行動」と、2つの上位尺度の「内向尺度」と「外向尺度」がある。日本語版は倉本ら(1999)により標準化されている。

統計学的分析は、IBM SPSS Ver23 の SPSS Statistics BaseとSPSS Missing Valuesを用いて実施した。YSR の回答は、多重代入法で欠損値処理を実施した。いじめ経験は、「身体的暴力」「無視・仲間はずれ」「言語的暴力」「ネット暴力」「盗み・隠匿・損壊」「脅し」のうち、1つでも被害経験があり加害経験のない者を「Victim」とした。1つでも加害経験があり被害経験がない者を「Bully」とした。さらに、被害と加害の両方の経験がそれぞれ1つ以上ある者を「Victim + Bully」とした。被害と加害の両方の経験がない者を「Neither」とし、「Victim」「Bully」「Victim + Bully」「Neither」の4群に分類した。「Victim」「Bully」「Victim + Bully」「Neither」の4群間で、下位症状尺度、及び内向尺度・外向尺度の平均に差があるかを検定するため、1元配置分散分析を実施した。Post Hoc テストは Tukey の検定を用いた。有意確率は 1%未満とした。自殺念慮といじめ経験との関連は相対リスクにより分析した。自殺念慮は、YSR の質問項目の「私はわざと自分を傷つけたり死のうとしたりする」と「私は自殺しようと思うことがある」の回答により、「自殺念慮なし」と「自殺念慮あり」の2群に分類した。相対リスクは、「Neither」を基準として、「Victim」、「Bully」、及び「Victim + Bully」について求めた。分析は、小学生 5・6 年生と中学生の別に、男子と女子に分けて実施した。

## 結 果

調査協力に同意した者から、保護者が非協力書を提出した者、「学年」「年齢」「性別」のいずれかに未記入のあった者を除いた 827 名を分析対象者とした。小学 5・6 年生(以下、小学生)(平均年齢 11.26 歳)は 338 名(男 175 名、女 163 名)、中学生(平均年齢 13.76 歳)は 492 名(男 243 名、女 249 名)であった。

いじめ経験の割合は、小学生男子は、「Victim + Bully」は 45.2%、「Neither」は 26.2%、「Victim」は 20.8%、「Bully」は 7.7%であった。小学生女子は、「Victim」は 32.1%、「Victim + Bully」は 19.8%、「Bully」は 5.6%であった。中学生男子は、「Victim + Bully」は 14.9%、「Victim」は 12.8%、「Bully」は 9.8%であった。中学生女子は、「Victim + Bully」は 16.9%、「Victim」は 15.7%、「Bully」は 3.7%であった。

いじめ経験と下位症状尺度、及び内向尺度・外向尺度の平均値の関連では、小学生男子の「Victim + Bully」は、ひきこもり、社会性の問題、非行的行動、攻撃的行動、外向尺度が、「Victim」は、ひきこもり、社会性の問題が、「Bully」は、攻撃的行動が「Neither」よりも有意に高かった。小学生女子の「Victim + Bully」は、身体的訴え、不安/抑うつ、社会性の問題、思考の問題、非行的行動、攻撃的行動、内向尺度、外向尺度が、「Victim」は、不安/抑うつ、社会性の問題、注意の問題が、「Bully」は、攻撃的行動、外向尺度が「Neither」よりも有意に高かった。中学生男子の「Victim + Bully」は、社会性の問題、注意の問題、攻撃的行動、外向尺度が、「Victim」は、ひきこもり、不安/抑うつ、社会性の問題、注意の問題、内向尺度が、「Bully」は、注意の問題、攻撃的行動が「Neither」よりも有意に高かった。中学生女子の「Victim + Bully」は、下位症状尺度のすべてが、



「Victim」は、ひきこもり、身体的訴え、不安/抑うつ、社会性の問題、内向尺度が、「Bully」は、非行の行動が「Neither」よりも有意に高かった。

自殺念慮の相対リスクは、「Neither」に対してのオッズ比が、小学生男子の「Victim + Bully」が 4.85、小学生女子の「Victim + Bully」が 18.82、「Victim」が 9.75 で相対リスクが高かった。中学生男子の「Victim」が 4.28、中学生女子の「Victim」が 3.92、「Victim + Bully」が 2.51 で相対リスクが高かった。

## 考 察

分析対象者の40～60%が本研究で定義した「いじめ」を経験しており、日本の前青年期と青年期の若者において、「いじめ」の経験の頻度は高いと考えられる。小学5・6年生、及び中学生は「Bully」の割合が低く「Victim + Bully」の割合が高かった。いじめの加害者の多くは、いじめの被害者でもある可能性が示唆される。被害者と加害者が入れ替わりながらいじめが行われているのが日本の前青年期と青年期の若者の特徴と考えられる。小学5・6年生、及び中学生の「Victim」、「Bully」、及び「Victim + Bully」は、精神的健康への影響のパターンに違いがあった。「Victim」は内向的問題を、「Bully」は外向的問題を、「Victim + Bully」は内向的問題と外向的問題のどちらも多く抱える可能性がある。さらに、「Victim」と「Victim + Bully」は、自殺念慮のリスクが高くなっていた。いじめの被害経験は、加害経験の有無に関係なく自殺念慮のリスクを高める可能性がある。いじめの被害者への精神的ケアは、自殺予防の観点からも重要であると考えられる。

小学生男子と中学生男子では、いじめ経験と精神的健康問題との関連に大きな差はなかった。しかし、女子では、中学生女子の「Victim + Bully」が、全ての下位症状尺度と内向尺度・外向尺度において得点が高く、自殺念慮のリスクも高くなっていた。この結果から、中学生女子の「Victim + Bully」は、精神的健康に深刻な影響を受けている可能性がある。女子は、前青年期より青年期の方が、より強く精神的健康に影響を受けると考えられる。

## 結 論

本研究の結果、いじめの被害経験も加害経験も精神的健康に関連していることが示された。また、いじめ経験は自殺念慮のリスクにも関連していると考えられた。特に青年期の女子において、いじめの被害と加害の両方を経験することが精神的健康に負の強い影響を与える可能性が示された。本研究は、前青年期と青年期に分けて、いじめ経験と精神的健康への関連を分析した数少ない研究として意義があると考えられる。さらに、いじめ経験による精神的影響は経年的に持続するとの報告もある。今後は、いじめ経験と精神的影響の関連を縦断的に研究する必要がある。